

「未来高岡」ステップアップトーク（五位山地区）会議記録 <要旨>

1、日 時 平成 28 年 10 月 29 日（土） 午前 10 時から 11 時

2、場 所 五位山交流館

3、出席者 市民 35 名（うち女性 10 名）

高岡市

市長、広報統計課長

4、会議次第

(1) 高岡市総合計画基本構想の紹介

(2) 参加者との意見交換

.....

(1)高岡市総合計画基本構想の紹介

(2)参加者との意見交換

参加者

- ・総合計画基本構想の説明の中で、公共施設の維持に年 25 億円が不足するとあったが、とやま・ふくおか家族旅行村にあるロッジ山ぼうしも公共施設の縮小や廃止等の対象になるのか。

市長

- ・現状のまま公共施設を維持していくのは難しいと感じている。ロッジ山ぼうしは、宿泊なども行っており経営の観点も必要となってくるので、地域でも今後のあり方について考えてほしい。例えば、ロッジ山ぼうしでしかできない体験等を用意し、それを発信するなどの工夫も必要である。ロッジ山ぼうしは大きな施設であることから、一度の議論ですべての課題を解決することは難しいと思うが、運営を継続していくため地元とも協議していきたい。

参加者

- ・今年 9 月に起きた大雨のため、林道八谷線に崩れた箇所がある。地元でも協力しながらすでに対応は行ってもらっているが、地域にとって重要な道路であることから早急に復旧してもらえようをお願いしたい。

市長

- ・現在、国や県とも相談し災害査定がされることになっている。冬期間の工事の進捗にもよるが、来年の 5 月から 6 月頃までには復旧したい。

参加者

- ・新しく五位山交流館ができ、毎週日曜日には高岡フィルハーモニー管弦楽団に利用してもらっている。今後も、同施設を長く利用できるよう行政からの支援もお願いしたい。

市長

- ・高岡フィルハーモニー管弦楽団に五位山交流館を利用いただき感謝している。地域の方々にもぜひオーケストラに親しんでほしいと願っている。

五位山交流館は様々な利用方法が考えられると思うが、例えば学生や子どもたちが、同施設で合宿を行い地元の方々と交流することで定住に繋げていくことも一つの方法である。また、その他の例として、大人が廃校となった校舎を利用して様々な勉強を行う“熱中小学校”という取り組みがあるが、現在、高岡市において、“熱中寺子屋¹”という取り組みを瑞龍寺で行っている。五位山交流館でもこのような取り組みが行われれば面白いのではないかと思う。また、緑のふるさと協力隊²なども活用することで定住者を増やし、里山のPRに繋げていければと思う。里山に人が住むような流れをつくりたいと考えており、五位山地区の取り組みや活動成果を全国に発信し、交流を盛んにすることで同地区にも多くの方が訪れるようにしていきたい。

参加者

- ・最近イノシシの出没が増え、田畑だけでなく住宅の近くにも来ており、地元でも見回りなど行っているが限界がある。イノシシを捕獲した後の処分にも課題があり、新聞報道されていた移動式解体処理車³というものを、五位山をモデル地区として導入できないか。

市長

- ・移動式解体処理車については、どのようなものかも含め調査してみたい。イノシシ対策については以前から行っており電気柵の設置が進んだが、根本的な解決とはならず、頭数を減らすためにはやはり計画的な一斉捕獲等が必要と考える。そのため、捕獲員が増えるよう資格取得にも支援できるようにしたい。課題となっている捕獲後の処理についても、食用としてビジネスにできるほどの数が捕獲できるわけではないため処理方法についても検討していきたい。

¹ 「歴史と文化」「ものづくり」を活かし、新たな視点から観光振興を実現するための人材育成を目的として、平成 28 年 9 月 17 日より瑞龍寺において開校している。

² 農山村に興味をもつ若者が、地域再生に取り組む地方自治体に一年間住民として暮らしながら、地域密着型の活動に携わるプログラム。

³ 日本ジビエ振興協議会と長野トヨタ自動車株式会社が共同開発した試作特装車で、車内で鳥獣の解体ができる。平成 28 年 7 月に試作車が完成し、8 月から長野県で実証実験が始まった。

参加者

- ・西明寺のパークゴルフ場の設備を充実させてほしい。
- ・西明寺地区は、東西にある山の間 100m 程の範囲に 40 軒ほどの民家が集まる地区であるが、同地区にあった災害対策を行ってほしい。

市長

- ・山間部では、山崩れなどで道路がふさがり孤立する恐れがあるため法面の保護等を行っている。地域での災害対策としては、あらかじめ危険個所を把握し避難経路を確認することをお願いしている。まずは避難することが大事であり、避難場所や警報の周知方法を含め地元とも相談していきたい。

災害対策は年々複雑になっており、警報も早期の段階で発令されるようになってきている。現在、1,000 年に 1 度の大災害に備えるよう国や県とともに協議しており、庄川や小矢部川の堤防についても話がされている。そのため、国に対しては堤防の整備を十分に行ってもらえるよう要望している。

参加者

- ・3 年前に緑のふるさと協力隊で五位山に来た方が、現在も住んでくれている。今後の緑のふるさと協力隊の取り組みについてどう考えているのか。

市長

- ・緑のふるさと協力隊の受入れをはじめて 5 年になるが、現在、市内にはその卒業生が 2 名と研修生が 1 名おり、その活動に感謝している。高岡市は同じ取り組みを行っている市町村の中でも成功率が高い。このような活動を通じて地域に住むことは大変なことで、上手いかないケースもあったが、最近では相互の理解が進み、定住希望者を受け入れるためには何が必要かを考えるようになった。緑のふるさと協力隊の卒業生で定住されている方には、同じ志をもつ仲間と呼びかけを行ってもらい、地域の方には、それを自分たちの仲間として受け入れる方策を考えてほしい。高岡市の受入れプログラムは好評だと聞いており、受入れを希望する地区があればぜひ続けたいし、高岡市全体でプログラムを集約することも考えていきたい。